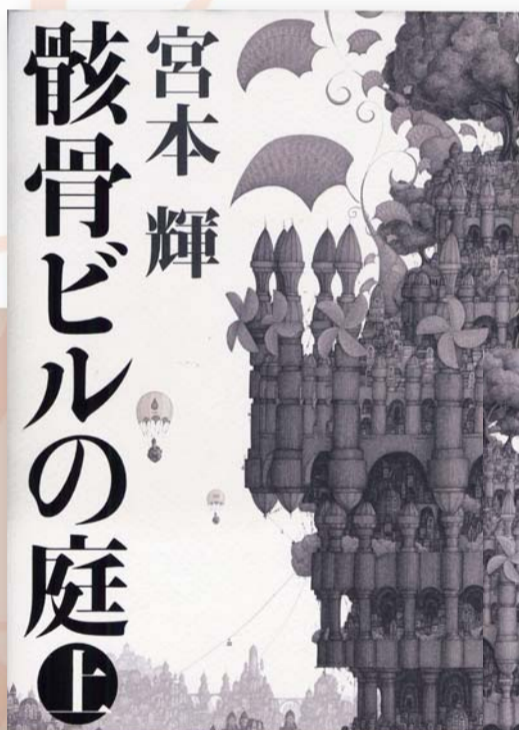


「ぼくが光のなかから
来たのではない、
この子たちが光のなかから
来たのだ」



2009年 講談社

Story

舞台は平成6年の大阪・十三。八木沢省三郎は、再就職先の仕事で取り壊しが決まっている古びた西洋建築のビルの管理人として派遣される。そのビルは「骸骨ビル」と呼ばれ、戦後2人の青年と戦災孤児たちが貧しい時代を共に生き抜いた場所であった。今でもビルに居座り続ける住人たちが八木沢に語るそれぞれの思い出によって、「骸骨ビル」のかつての日々が鮮明によみがえっていく。

第13回司馬遼太郎賞を受賞した長編小説。

司馬遼太郎賞とは

作家 司馬遼太郎の活動を記念した文学賞。文芸、学芸、ジャーナリズムの広い分野の中から、創造性に富み、さらなる活躍を予感させる作品を対象に選考し決定する。全国の報道機関、作家、学者、文化人から回収したアンケートによって候補作品を選出し、その後、候補選定委員会がアンケート集計を参考に、候補作品を選定。最終的に、選考委員会で決定する。2009年選考委員は、Donald・キーン、井上ひさし、柳田邦男、養老孟司、松本健一、関川夏央の6氏。(参考 司馬遼太郎賞記念館HP)

第13回司馬遼太郎賞を受賞した「骸骨ビルの庭」は、贈賞理由として「司馬遼太郎がみつめた近現代史の中で、作品化が及ばなかった戦争が、戦後に残した日陰の部分に視線を向け、文学的に表現したといえる。」と評価された。贈賞式は、故司馬遼太郎氏をしのぶ「第14回菜の花忌」(2010年2月13日)に、東京・日比谷公会堂にて行われた。



受賞者スピーチの様子
[写真提供: 司馬遼太郎記念館]

人間の心の強さ

戦後、さまざまな理由で親や兄弟と別れた戦災孤児たちと、育ての親とふたりの青年。彼らを通じて見えてくるのは「心の強さ」です。

現代社会では些末なことでも心が折れてしまいがちですが、この作品を読むと、これからも前を向いて歩いていけるような確かな希望を感じることができました。

Review